

第一回 WEB 国際会議（2011 年 10 月 15 日開催）
～稲垣研究員からシュテンガー教授への特定質問～

村上先生 どうもありがとうございました。シュテンガーさん、とても内容豊かな、とりわけ明証性の概念をめぐって、デカルト主義とその体験領域および現象の発見ということから始まり、いわゆる明証性はいかなることを通して明証性になるのかという根元的な質問をなさり、最後に生活世界の概念を導入されまして、生活世界の土壌の上にこそ、新たな意味での普遍数学に見合った、普遍的な、新たな学問体系を構築できるのではないかと。あるいは、生活世界を忘れない、生活世界からの叫びを十分に組み込むような、新たな意味での普遍数学の可能性について述べてくださいました。非常に内容が豊かなもので、様々な観点からの質問が出てくるとは思いますが、まずもって、稲垣さんからの質問を始めていただきたいと思えます。

稲垣先生 シュテンガー先生、どうもありがとうございました。フッサール研究をやっている者からしても、非常に簡潔に、しかも、内容豊かにまとめていただいたと思っております。

私がお伺いしたいのは、最初のほうに先生がおっしゃった、フッサールが最終的に解明しようとしていた人間の在り方として、単に認識するものだけではなく、方向づける存在、**Orientierungswesen** としての人間の在り方を解明しようとしていたとおっしゃっていましたが、この点について少しお伺いしたいのは、方向づける存在としての人間の在り方に関してですが、生活世界の中から汲み上げられた直観に基づいて初めて、方向づける在り方としての人間が明らかになるということだとは思いますが、例えば、フッサールは『危機書』の中で、あらゆる人間、あらゆる異他的人間のヨーロッパ化、あるいはすべての世界のヨーロッパ化が絶対的な意味を持つのか、あるいは理念を持つのかというようなことを話しています。

そのこと自体は既に何人かの研究者から批判を、つまり、ヨーロッパ中心主義という批判を行われてもいるわけですが、問題は、フッサールのように、認識や様々な経験の前提を問うていく現象学を行っていたとしても、フッサールが生きた、あるいは私たちが生きている生活世界の中で、見えないような生活世界固有の特性、性格、そういったものに縛られてしまっている可能性があるのではないかと。つまり、生活世界自体が何か普遍的なものというよりも、もともとフッサールが言っているように、相対的な、ある種の生活諸世界、生活世界の複数性といった問題があると思われるんですが、そこで、シュテンガーさんのまさに研究なさっている間文化性といった問題が立ち上がってこざるを得ないと考えられます。その中で見えてくる、方向づける存在としての人間の在り方について、フッサール

がそこまで踏み込むことができなかつた問題についての何らかの見通しや思いというものがありましたら、お伺いしたいというのが質問です。

シュテンガー先生

(通訳なし・シュテンガー先生のお応えの内容は山口先生が要約なさいました)

(シュテンガー先生のお応え)

山口先生 質問に対するお答えですが、方位づけるということに関して、これが認識することと対比させて考えられているんですけども、実はそうではなくて、根本的な特性、人間の特性として認識することの中に、既に根本的に生活世界の中で生じるということが実は起こっているのであって、起こっていることの **Konkretion** (具体化) ということであるならば、具体的に起こっていることの内実を分析したときに初めて、見ることと見られることとの相関関係といった形での認識の構図が生まれてくるわけです。認識の構図が生まれてくることと、生活世界の中に生きることというのは、別々に起こっていることではなくて、生活世界の中に生きるということが初めにあって、その中から気付かれてくることとして、つまり、人格の自由とか、様々な生活世界に関わる、単に認識に関わらない全体的な生について言及しましたが、全体的な生の中に既に起こっていること、その起こっていることを解明することが、実は **Orientierung** という認識の仕方を解明することにつながっているということであって、認識することと **Orientierung** することが別個に出来上がっているのではないということ、まずもってお答えとしたいと思います。

シュテンガー先生

(通訳なし・シュテンガー先生のお応えの内容は山口先生が要約なさいました)

(シュテンガー先生のお応え)

山口先生 ヨーロッパ中心主義を引き金として、様々な哲学者からの批判として言われているんですが、とりわけ『危機書』の **Lebenswelt** (生活世界) の概念をよく見てみればわかるように、まず、それは主観的に相対的であるということ。しかも、単に事実として主観的に相対的であるというのではなくて、超越論的な意味で主観的に相関的であるということが常に述べられています。そして、大事なのは、**Orientierungswesen** (方向づける存在) というのは、要するに、どのようにそれぞれの生活世界に向かって生きているのかという在り方、つまり、他の人々との社会性の中に、それまでの歴史を踏まえ、しかも、他の人々とのつながりの中で生きているということが生活世界の根底にあるものです。この根底にある、しかも、超越論的な条件性としてそこに備わっている規則性をいけば明らかにすることが『危機書』で言われている重要な点で、ですから、確かにヨーロッパ中心主義ということが言われたとしても、複数の生活世界の中に横たわっている、そのような隠れて働

いているような規則性の開示に開かれている、いわば間文化的な現象学に開かれているという根本的な姿勢が、生活世界の概念そのものの中に、そのような要因が含まれているということを理解すべきではないかと思います。